

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

ごく普通に見慣れていたものが、気がつくとなくなっていくことがある。県内を歩き始めた昭和50年代初め、少数ながらまだあちこちに残っていた茅葺きの屋根もそうだし、風呂敷もその一つだ。

1975年11月にフランスのランブリエで第1回のサミット(主要先進国首脳会議)があった。その時、日本の外交官が書類を包んだ風呂敷包みを持って会場に入りしただけが目を集めたという。当時、役所でも風呂敷が普通に使われていた。結びを解いて、最新の政治情報を取り出す四角い布切れは、外国人に

は実に不思議なものに見えただろう。

官庁や学校、商店や行商、一般家庭など、かつてはいたるところで大小の風呂敷が、運搬や保存や儀礼の目的で用いられていた。子供の頃、親戚の年寄りが糶殻の入った箱に卵を埋め込んだものを、風呂敷に包んでお土産に持ってきた光景を、今もよく覚えて

いる。物を包む布は、正倉院御物にもある。伎楽装束や僧の袈裟を包む布には、紐も縫い付けてある。

「古路毛都々美」や「平包」と呼ば

れていた。平安時代末の「扇面古写経」下絵には、衣類をはちきれるほど包んで頭上で運搬する女性の様子を描かれている。室町時代を経て江戸時代に入ると「風呂敷」と呼ばれるようになる。徳川家康が病



春覚寺(宇陀市室生下笠間)の十夜のお供え—田中真人氏撮影、2009年11月

死した1616(元和2)行と関係している。風呂敷という言葉の由来は、風呂場に敷いて足を拭うとか、風呂場で脱いだ衣服を包んだり、濡れたものを持ち帰ったりするためと言われるが、湯上りに敷く風呂敷といえるは足利家のとき浴の饗応ありしに、夫々の衣服間違さるやうに、定紋など付し衣袱に衣服をつつまれしを、湯上りに敷く人有しより、風呂敷なりと従者の心得しより、衣袱の物名となれり(『随筆嗚呼牟草』)が当を得ているように思う。

民俗社会での風呂敷の使い方は多様で、私が目にしたものでは、田原本町のノガミ行事で、子供がトーヤの家に食事を呼ばれに行く時、おかずを入れた碗一つを風呂敷に包んで行ったり、大和高原の女性だけで営む十九夜講で、相手の家に世話をかけないように、自分の食器を小さな盆にのせ風呂敷に包んで持参したりするなどがある。宮座行事で衣装を着替える時に、着替えた衣服を風呂敷に包んでおくことがあるが、風呂敷の名の起りに、最も近い用い方だといえるだろう。

使い方 多様な風呂敷

(奈良民俗文化研究所代表)

次回は24日